

114  
A5161

洋銅

北京ノ公署ニ在リ、偶々新聞紙ニ於テ、清國商民カ我  
國ノ銅貨ヲ括買シ、為ニ銅貨ノ拂底ヲ致シ、小民  
不受ヲ為スコトヲ載スルヲ見タリ、予ハ此事ノ實否  
ヲ確知スルニ由レナシト虽モ、此ノ新聞ハ予ヲ導イテ清  
國鑄錢ノ際略ヲ涉獵スルニ至ラシメタリ、  
是利氏ノ時ニハ、明ノ永樂錢ヲ仰イテ、以テ我カ通貨  
トナシ、歲ヲ逐テ輸入シタリシニ、徳川氏以後ハ、對シ  
テ、我カ銅錢ノ清國ニ輸出スルコト甚々多ク、新井白石

A 3573 (2)



六寧春吉等ノ概論スル証トナリタリ

按ルニ清國ハ專ラ銅錢ヲ以テ通貨トシ、其鑄造ノ

所ハ戶部ノ宝泉局アリ、工部ノ宝源局アリ、宝泉局

毎歲七十二卯ヲ鑄ル、一万二千四百八十緡ヲ一卯ト

ス、溶トハ制錢一千個ヲ一緡トス、一丁串ト云、是ノ七

十二卯ハ即チ八十九万八千五百六十串ナリ、現在洋銀一  
百大約

文錢ニ當ルル者ハ十九万串ハ  
八十九万圓ノ價ナリ七十二卯共ニ銅四百三十一万

九千十二斤九兩一錢一分二厘ト、白銀二百八十四万六千十

六斤、黑銀二十四万六千八百八十五斤十一兩三錢三分六厘ヲ用

ス、又閩ニ思ハハ四卯ヲ加ヘ鑄ル、宝源局  
未詳其他、直隸山西

江蘇江西福建浙江湖北湖南陝西四川廣東廣西ニ

各一局アリ、伊犁ニ一局アリ、雲南ニ二局アリ、貴州ニ

二局アリ、此レ其毎年需要スル所ノ銅料、蓋シ小ニ非

ガルナリ、清國銅ヲ産スルノ地ハ、雲南ヲ以テカ一トス、

四川湖南等ノ銅礦ハ産出多カラズ、而シテ雲南ニ次ヲ

以テ我カ日本銅ノ美ヲ稱シ、名ケテ洋銅ト云、雲南銅ノ

戶工兩局ノ為ニ毎歲辨運スル者計、六百三十三万一

千四百四十斤、其他各省ニ應辨スル者、亦幾百万斤、

而シテ直隸陝西江蘇浙江湖北江西ノ六省ハ、雲南銅

ノ外、另ニ洋銅ヲ用フ、洋銅ニ購買スルニハ、皆商民ニ托

彼一斤我百  
六十二錢四分  
三厘三毛下  
ノ一二三

又直隸陝西湖北江西四省ハ、委員ヲ蘇州府ニ於テハ、殷富ノ商民數名ヲ選ビ、定員トシ、互ニ相保結セシメ、官ヨリ資本ヲ給以承辦セシム、每銅百斤、大約我カ百斤ト相當ス價銀概テ十三兩五錢九分三厘ヲ以テ準トス、每歲六省ヲ合セテ、洋銅需要ノ價銀六万八千七百六十七兩八錢二厘五毛八糸ニシテ、官銅總テ六十一万餘斤トス、其他、民商ノ自ラ資本ヲ備ヘ洋銅ヲ買ヒ、江蘇浙江江西ノ三省ノ採辦ニ供應スル者、毎年四十八万斤、每百斤、價銀十五兩三錢ヲ給ス、又福建湖北等ノ省モ、亦商販ノ洋銅ヲ採買ス、每百斤、價銀十七兩五錢ヲ給ス、價銀ノ

同カナルハ、運搬ノ遠近ニ依リ、是レ乃チ我國ノ銅、彼ノ地方政府ノ需要ニ供スル者、毎年定額アリテ、百万斤ニ下ナルナリ、戸部則例等ニ據ル長髮賊ノ乱ニ、雲南ノ道塞カリ、北京政府ハ、銅料ニシテ、久雨庫ノ急ヲ塞ク為ニ、小錢ヲ鑄リ、鉄錢、鉛錢ヲ鑄ルニ至レリ、曰幕ノ末年ニ、銅ノ輸出盛ニシテ、且ツ高價ニ得タルハ、蓋シ此時機ニ當ルナリ、維新ノ後、銅ノ輸出頓ニ減シ、且ツ其價ヲ落シタルハ、清國內亂ノ餘勢、全ク消シタルニ由ルナラン歟、又清國政府、小錢ヲ鑄造シ、之ヲ以テ、銅ノ鑄ノ弊

甚々多ク、成豐ノ比ニハ、小錢、惡錢ノ沙錢ト云ル者、盛  
ニ行ハレ、一時錢價低落、銀價昂貴ノ勢ヲ極メタレハ、乱  
平クノ後、政府ハ務メテ錢貨換雜ノ害ヲ除カントシ、先  
モ亦其舊ニ復スルコト能ハズ、光緒四年ノ春、銀價一  
兩、幾ト二千又ニ上リシハ、亦沙錢多キノ致ス所ニ係ルト云  
現ハ私鑄ノ弊ハ稍除クト虽モ、然レモ私錢混用ノ弊ハ仍  
禁スルコト能ハズ、予カ天津ヨリ北京ニ入ルノ途中、河西務ト  
云驛ニテ、錢ヲ買フタルニ、其三分ノ一ハ惡錢ナリシ、夫レ惡錢  
混用ノ害、断タザレハ、私鑄ノ弊、亦塞クベカラズ、故ニ清國  
ノ庶民、其私鑄ノ資料トナシ、爲ニ我銅貨ヲ括買ス  
ルコトアルモ、亦知ルベカラズ

彼國ニ於テ寬永錢ヲ混用スルハ、道光年間マテハ猶ホ  
犯禁ノ事タリシ、林則徐ノ奏議ニ、寬永錢虽可撓使、  
尚不甚多、剔除較易、自當隨時查禁、不任稍有混流、  
ト然レモ現今ニ在テハ、其禁令アルニ拘ラズ、民間ニテハ  
寬永錢ヲ珍重シ稱シテ古錢トナスト云、  
以上ノ事情ニ依テ考察スルモ、未タ清高ノ我カ銅貨ヲ括  
買スルノ明確ナル理由ヲ見出スコト能ハズト虽モ、若シ我カ  
銅貨ハ或ハ銀價騰貴ニ因リ、或ハ其他ノ原因ニ由リ、稍  
低下ノ市價ヲ顯ス片ハ、彼匪官私ヲ論セバ、新テ之ヲ

購運シテ以テ鑄錢ノ資料ニシテモ亦料ルニテ輕ク  
記シテ以テ後日ノ報聞ヲ待ツノミ、

明治十三年六月

在北京公使館 井上親